

## コトカタ向上母店

ゆ

こ

「あーあ。失敗した」

吐き出した言葉が白い空気が変わって、消える。まだ風も冷たい、立春とは名前ばかりの二月。お気に入りの黄色いコートに赤い長ぐつと手袋。それからお母さんに編んでもらったマフラーをまいて、芽衣は四年間通い続ける学校を出た。

雪で真っ白に染まったアスファルトを眺めると、ついさっきのことを思いだす。三時間目の図工の時間。お題は動物。絵が得意な芽衣は、ふわふわのうさぎを描こうとした。

しかし、描けたのは耳が曲がったブサイクなうさぎ。友達から、  
「芽衣ちゃんのうさぎ変なの。全然かわいくない」  
と言われてしまった。

それだけ。描くのを失敗しただけ。それでも芽衣は嫌だったのだ。かわいい絵が描けなかったことも、『失敗』をしたことも。



(失敗なんて嫌。ゼーんぶ上手くいったらいいのに)

失敗をすればするほど自分の能力が低くなっている気がしてならない。どんなに完璧な人でも失敗はするし間違いをおこすこともある。そんなことは芽衣だって分かっているのだ。ただの自己満足。それも分かっている。でもやっぱり納得できなくて、ぐるぐる悩みながら通学路を歩く。

薄く積もった白い雪に足跡をつけ、ふたつに結った短い髪の毛をびよこ揺らしながら歩いていると、ふと、視界の端に映ったコーヒーを滲ませたようなベージュ色に目をとられる。

「何？ これ。古い…原稿用紙？」

いつもだったらそのまま通り過ぎるはずが、なぜか今日はこのホチキスでとめられた数枚の原稿用紙が気になっ  
てしょうがない。

雪をかぶった原稿用紙を拾いあげてじっくり眺めてみる。

「わあ！ 物語だ！」

無類の大好ききの芽衣は、原稿用紙に書かれている文章に胸が弾んだ。

「捨てられていたんだし…いいよね…？」

早く、読みたい。読まなくちゃ。頭の中が自分を急かすように騒ぎたてる。

不思議な引力にひきつけられるまま、原稿用紙を四つに折ってそっとポケットにしまった。

(早く帰ろう)

さっきまで悩んでいたのが嘘のように軽い足取りで、通学路を走りはじめた。

「ただいまーっ！」

走った勢いそのまま玄関のドアを開け、ダダダダッと部屋へ続く階段を駆けあがる。

「こら！ 芽衣！ 帰ったなら手を洗いなさい！」

お母さんの怒る声がかええたが今の芽衣には気にならない。

ベッドに腰掛けて、高鳴る胸をおさえ、原稿用紙に書かれた文字を目で追う。

(あれ…？　これって…桃太郎？)

そこに書いてある物語は、誰もが知る名作、『桃太郎』そのものだったのだ。

(拾ったときはもっと別の物語に見えたのに)

少し残念な気持ちになる。

「あ…でも、ちょっと違う？」

読み進めているうちに、芽衣は文字に隠された違和感に気づいた。

桃が流れてくるときの音、

『どんぶらこ』が『がっちゃんこ』に。

おばあさんが作った

『きびだんご』が『ばちばちあんこ』に。

似ているようで、全然違う。

「こんなの、桃太郎じゃない」

こんなの、おかしい。

あとは特に変わったところがなく、芽衣は読み終わった。だが、まだ一枚原稿用紙がのこっている。

(間違えたのかな？)

何の気なしにパラ…とページをめくる。

「なんにも書いてないや」



ただの白紙。なのに気になってじっと眺めてみた。

(なんだろう。なんか、光ってる?)」

あ、と思うひまもなかった。

原稿用紙からぶわっと金色の光があふれだして、芽衣の体をつつみこむ。

「な、なに!? まぶしい!」

くらくらするほどの光で目があけられない。しかし、光に気をとられている時間は、そう長くはもたなかった。ぐん、と体が持ち上がるような浮遊感が芽衣をおそい、それからはジェットコースターのように真っ直ぐ、ただ真っ直ぐ落ちるだけだったから。怖い、とか嫌だ、とか。そんな言葉はうかばなかった。本当はそう思っていたかもしれない。だが、芽衣はその時、なにも考えられなかったのだ。頭の中にあっただのは、自分が落ちているという事実と、それから、今から何か楽しくて面白いことがおこるに違いないという小さな予感だけだった。

どのくらい、たっただろう。

数秒かもしれないし、数分かもしれない。光と浮遊感が同時にスッと消え、気づいたら芽衣は自分の足でしっかりと地面に立っていた。

あんなに落ち続けたというのに、気持ち悪さや目眩はまったくない。それより、

「ここ、どこ…?」

でこぼこした地面。赤、青、黄色のカラフルな木々。つかめそうなくらい低いところにかぶふわふわの雲。

(…おとぎの国みたい)

人はみえない。まるでこのへんてこな世界に一人だけとり残されたみたいで気味が悪くなる。不思議と、家に帰らなきゃ、とかは思わなかった。気味が悪いのに、心のどこかでこの状況を楽しんでいるような気もする。

(とにかく、歩こう)

立ち止まっても意味がない。芽衣はでこぼこ道を進もうと一步踏み出した。その瞬間。

「わっ！」

今までなかったのに突然、目の前にアンティークな家が現れた。

「小さい…本当にここに人が住めるの…？」

小さな小さな家だった。それこそ物置や小屋のような小ささだ。窓はついているが暗くて中は見えない。

ふと、家の壁にシンプルな木の看板がかけられているのが分かった。

『『コトカタ向上毒店』…？』

『コトカタ向上毒店』たしかに看板にはそう書かれている。

(どういう意味なのかな？ こんな名前、聞いたこともない)

考えても分からないし他に行くところもないので、芽衣はその小さな家のドアをノックした。

「おや。今日はずいぶんとかわいとお客様ですね？」

ギィと音を立てて小さな家の小さなドアから出てきたその人の格好ときたら！

二十歳と言われるとそうだし四十歳だと言われてもそう見える優しげな顔。白髪か銀髪か分からない頭に赤くてブヨブヨした帽子を被っている。服もへんてこで、つぎはぎだらけの執事服のボトムスはジャージだし、ブカブカのブーツに足をつっこんでいてどこからどう見ても変質者だ。さらに不思議なことに、体のまわりに大小様々な泡をぶかぶかまとまっている。

「あの…すいません。聞きたいことがあって…」

緊張でカラカラになった喉で声をふりしぼる。男の人は優しい顔でにっこりと微笑んだ。泡もそれに合わせてぶかぶか揺れる。

「ええ。答えられるものなら何でもお教えしますよ。どうぞ、お茶でも入れて話しましょう」

その人にならって頭をかがめながらドアをくぐる。家に入って見えたものに芽衣はおもわず声をあげた。



「わあっ！ すごいっ！」

中は、思っていたよりだいぶ広い。けれどその広いスペースには小物や古本、子供のおもちゃに骨董品などたくさんのものでいっぱいにあふれている。そしてそのたくさんのおもちゃは、まるで宝物のようにキラキラ光って見えた。高く積み重ねられた古本やぬいぐるみに負けないくらい目を光らせる芽衣に、男の人は奥の部屋へ案内してくれた。

その部屋は、さっきに部屋よりせまく、物もソファとテーブル以外ほとんどない。

「どうぞ。おかけになって下さい。」

男の人が真ん中においてあるアンティークなソファにすすめてくれる。ぱっと見はボロボロのソファだけど、座り心地はふわふわとしていて体の疲れがとれていくようだ。

「さて、自己紹介をしましょうか」

男の人が向かいのソファに座る。

「えっと、芽衣です。発芽の芽に衣類の衣。小学四年生で、十才です」

「芽衣さんですね、いい名前です。私はこのコトカタ向上葛店の、そうですね…店長、とてもいいかもしれません。あと、私には名前がないのです。好きに呼んで下さい」

ちよっぴりさみしそうに笑うその人がまとう泡を見て芽衣は思いつく。

「じゃあ、あわあわさんって呼びます。きっと似合うと思って」

泡たちがうれしそうにぶかぶか揺れた。

「ふむ。いいですね。ずっと、名前が欲しいと思っていたんです」

あわあわさんもうれしそうだ。

「では、紅茶とケーキを用意しましょう」

あわあわさんが指揮者のように手を数回ふると、どこからかキラキラとした光と共に、オシャレなティーカッ

プやポット、それから、真っ赤なイチゴの乗ったショートケーキが出てきてテーブルに並んだ。

「わっ！ すごい！ どうやったんですか!？」

おどろきに目を見開き、興奮して身を乗り出すと、古びたソファがギシ、と音をたてた。

「ふふ。秘密ですよ」

あわあわさんはバチリとウインクをするだけで教えてはくれない。

「どうぞお召し上がり下さい。こう見えてお菓子作りは得意なんです」

進められるままショートケーキを口に運ぶ。

「…おいしいっ！」

口に入れた途端ケーキがシュワツととけ、クリーム of の優しい甘さが口いっぱい広がる。

紅茶もケーキに合うように作られていて、緊張していた喉が潤った気がした。

「あの、本当においしかったです」

芽衣がケーキを食べている間、あわあわさんはずっと待っていてくれた。

「そう言われるととてもうれしいです。…さて、聞きたいことは何ですか？」

芽衣はハツとして本来ここに訪ねた理由を思い出した。

「えっと、私何でここにいるのか知りたくて」

芽衣は原稿用紙のことをあわあわさんに伝えた。

「ああ！ あの原稿用紙、芽衣さんが拾ってくれたんですね」

あわあわさんがボンと手を打った。

「実はアレ、私を書いたものなんです」

突然のカミングアウトにおどろきを隠せない。

「え、でもあの桃太郎、本物とちょっと違います…よね？」



ずっと気になっていたことを聞いてみる。

「ええ。だってこっちの方が面白いので。だけど、そうですか。芽衣さんの住む世界に、行ってしまったんですね」

どこかその言葉に違和感を感じた。

「世界？ 私の住むところとここは違う世界なんですか？」

世界が違うのなら、もう戻れないかもしれない。さっきまで感じなかった恐怖で頭がいっぱいになる。

「世界が違うと言われたら確かに違うし、同じだと言われたら、それもあっている。そんな、あやふやなところなんです。ここは。ですがややこしいので、芽衣さんの住んでいるところを別の世界と表現しています」

あわあわさんが紅茶を初めて一口すすった。

「どういうことですか？ ここは地球のどこかなんですか？ 地球の中にあるけど私達地球人には行けない場所とか…」

紅茶の味に満足したらしく、一度大きく頷いてあわあわさんが口をひらく。

「ほとんどあっています。ここは地球のどこか。しかし場所は誰にも分からない。ああでも、地球人にはいけない場所というのは間違いですね。現にこうして芽衣さんがいるのですから。ここには、ここを必要だと心の底から感じた方にしか来られないのです」

あわあわさんが今度はケーキを一口食べた。

「でも、私は心の底から必要だと感じていないです。それに、コトカタ向上商店なんて聞いたこともないし…」それを聞いたあわあわさんはにっこり笑った。

「心の底から必要だと、頭の中で考えるだけではないのです。たとえ無意識でも、本能で感じることもあるのですよ」

「本能で、感じる…」



ゆっくりつぶやいてその言葉のみこむ。

「ええ。…さて、ここ、コトカタ向上蔦店についてお話ししましょう」

一歩気になってるのが話題に出て、芽衣はコクリと頷いた。

「そうですね、まず芽衣さんの世界に合わせてみましょうか。芽衣さんの世界では、ここは『言葉形工場ことばがたてうどう一号店』と言います」

あわあわさんがどこから取り出した紙に書いてくれる。

「どういう意味ですか？ それになんでここではコトカタ向上蔦店と言うんですか？」

「意味はそのまま。言葉成形にする工場ですよ。それこそ、桃太郎に私が書いた『パチパチあんこ』のように。コトカタは、言葉形、というのが長いので省略したんです。それから、向上蔦店の方が可愛らしくて工場一号店よりもよっぽど面白いでしょう？」

あわあわさんがニヤリと笑う。泡もそれに合わせてくるりと回転した。

「でも、そんなのおかしくないですか？ そんな理由で普通とは違う名前をつけるなんて。他の人にも変な目で見られるし、私だったら恥ずかしいです」

初対面なのに失礼なことを言っている自覚はあった。けれど、芽衣には分からなかった。あわあわさんがなぜ、面白いからとへんてこな名前をつけ、へんてこな服を着るのか。

「芽衣さんはおかしかったり変だったりするものが好きではないんですね。もちろんそれが悪いというわけではありません。人はそれぞれです。私は、面白いものが好き。自分の好き、に他人は関係ない。これだけ聞くと綺麗事のようにですが、本当なんです。ですがこの考えを芽衣さんに押しつけるつもりはありません。先程も言ったように人それぞれなんです。私は面白いものが好きだけど、芽衣さんは違う。たったそれだけのことではないですか？」

最後に優しく笑いかけられてしまえば何も言えなくなってしまう。それにあわあわさんが言っていることが



あまりにも正論だから。

（人はそれぞれ。人に合わせる必要もないし、かといって今の自分を無理に変える必要もない）

あわあわさんが言ったことを自分なりに噛み砕いて体内にとりこむ。黙りこくった芽衣を見て、もう一度優しく笑った。

「芽衣さんはやはり、心の底からここへ来ることを望んだようですね。さあ、ここからはコトカタ向上葛店の店長である私にお任せ下さい。言葉を形へ変えましょう」

言葉を形へ変える。

いつもだったらそんなことできないと真っ先に思うが、その時のあわあわさんには何でも出来ると強く感じた。

「芽衣さんは今、悩んでいることはありますか？ 強い願いはありますか？ 些細なことでもいいのです。

芽衣さんの心の中にある深くて大きななにかを私に教えて下さい」

（私にある深くて大きななにかってなんだろう？）

芽衣は考えた。本当に長い間ずっと考えていた。それでもあわあわさんはずっと芽衣を、待っていてくれる。そして、ふと、思い出した。芽衣の心に強く根付いた存在を。

「私は、失敗するのが嫌なんです」

「失敗、ですか」

心を落ちつかせるために一度紅茶をすすする。

「はい。例えば体育の五十メートル走で転んだり、ピアノの発表会でひき間違えたり。そんな小さな失敗でも自分を責めたくなってしまっんです」

あわあわさんは静かに話を聞いている。

「お母さんは、失敗は成功のもとだと言いました。先生は、失敗しない人はいないと言いました。言いたいことは分かるし、理解できるんです。だけど、いざ失敗したらやっぱり悔しいし、どうしようもなく嫌なんです。

大人は失敗したらうれいんですか？ 失敗したら次は絶対に成功するんですか？ こんなことを考える私は、おかしいですか…？」

熱くなった体を、もうとっくに冷めてしまった紅茶をもう一口飲んで落ちつかせる。

「…わかりました。芽衣さんにピッタリな言葉をお作りいたしましょう」

芽衣の質問には答えず、あわあわさんはキーキと紅茶を出したときののように手をふってみせた。あわあわさんの手から光がこぼれ落ちる。今回は青とか銀とか、心が落ちつくようなきれいな色の光。そんな光に見惚れていると、今度は何やらぐにやぐにやとしたかたまりがあらわれた。なんだか気持ちの悪い、手のひらくらいの大きさのソレは、深い深い海の色をしていた。

「なんですか？ それ。」

ぐにやぐにやを指さして聞く。

「芽衣さんにぴったりな言葉を形にしたのです。その言葉、いや、名前と言った方がいいですね。この子の名前は、」

あわあわさんは今日で一番の笑顔を見せた。

『だめだめドボン』です」

「だめだめドボン…？」

(だめだめ、とかついているけどいいのかな…)

思ってもいなかった名前にぱちくりと瞬きする。

「はい。だめだめドボンです。この子は名前の通り何をやっても失敗してしまうんです。体育の五十メートル走でもピアノの発表会でも。失敗して何もかも嫌になったとき、ふとこの子を思い出して下さい。自分の中に



いるだめだめドボンが出てきてしまったんだと、そう思ってみて下さい。そして、だめだめドボンが出てきてしまったことを許してほしいのです。誰だっけと閉じ込められるのは嫌でしょう？」

芽衣はひとつ、頷いた。だってもし自分が閉じこめられていたらもちろん嫌だと思っから。

「ああ、それと、少なくとも私は失敗してもうれしくはありませんね。でも、失敗して失敗して、また失敗して。それでもまだ諦めずに失敗した理由を見つけ一からやり直す、そんな人間になりたいと、私は思いません。まあ、それも人それぞれですけど」

あわあわさんの言葉はなぜか、芽衣の心に、すうっと簡単に入ってきた。今はまだ芽衣は、失敗を嫌ってへんてこを嫌うだろう。もちろん、それは悪いことではない。でも、それでも。あわあわさんの言うような人を目指すのも、悪くはないかなと心の中でひっそりと、そう思った。

「では、だめだめドボンを受けとって下さい」

もう一度あわあわさんが手をひとふりすると、ぷかぷかういていた、だめだめドボンはふわっとこちらにやってきた。手のひらで受け取ろうと両手でお皿を作ると、だめだめドボンは手のお皿へ収まり、しゅわっと音を立てて芽衣の中へ吸いこまれた。だめだめドボンに触った瞬間は冷たかったのに、体内に入るときはなぜだかとても、温かく感じた。

「これで、だめだめドボンは芽衣さんの中に入りました」

「ありがとうございます、本当に。やっぱり私はここへ来ることを心の底から望んでいたのかもしれませんが、そうじゃなければこんなに心は満たされなはずだ。」

「ふふ、やはり私の目に狂いはなかったのです。おや、寂しいですが、そろそろお別れの時間のようです。あわあわさんが芽衣には読み方の分からない時計を見ながら言う。」

「お別れ……って、私、帰り方が分からないんです。ただ原稿用紙に吸いこまれて来たので……」  
どうしようと焦る。

「帰り方など簡単なことです。ただ、ドアから出ればいいんですよ」

「どういうことだと聞く前に、芽衣が一番大事なことを思い出した。」

「あわあわさん！ 私、お金もってないんです。だめだめドボンももらったのに…」（返さないといけないかな…？）

残念な気持ちでうつむく。

「いえ。お金は必要ありませんよ。その代わり、ああ、そのヘアゴムを頂けますか？ 片方でいいので」

「ヘアゴム？ いいですけど…」

芽衣が二つに分けた髪につけているのは、ピンク色をした小さな花の飾りのついたヘアゴム。一年前に駄菓子屋さんで当たったものだったが意外に気に入ってつけているものだ。何より、ずっと使っているためかなり古い。

「これだけでいいんですか？」

不思議に思いながら芽衣は片方のヘアゴムを取って手渡す。

「はい。確かに受け取りました。私は物集めが趣味なんです。いろんなものがあるとワクワクするのでそれを受けたあわあわさんはうれしそうに笑った。」

「それでは芽衣さん。ドアの前にお立ち下さい」

「なんだかこちらまでうれしくなってしまうってドアの仕組みなんてどうでもよく思えた。」

芽衣は丸いドアノブをにぎる。

「あわあわさん、私、ここに来られて本当に良かったです。それに、だめだめドボンもありがとうございました」

あわあわさんは、少し寂しそうな顔でこちらを見ている。泡も心なしに寂しそうだ。

「いえ。私も、芽衣さんに会えて良かったです。なんせ、私の名付け親ですから」



あわあわさんは、笑った。うれしさと照れくさを混ぜたような笑い方だった。

「私、あわあわさんのこと忘れないです。ただの四年生の子供だけど。またここに来たいです。なので、あわあわさんも、私を覚えていて下さいね？」

「またね。あわあわさん」

さようなら、じゃなくてまたね。さようならだと、もう会えないような気がしたのだ。

「はい。芽衣さんのことは忘れません。絶対に。：それでは芽衣さん、またのお越しをお待ちしております」  
最後のあいさつを終え、芽衣はドアノブを回す。うれしかった。あわあわさんが、待っているという言葉を選んだことが、どうしようもなく芽衣はうれしかった。また、光につつまれる。ただ最初よりも光が淡く、優しい気がするのは芽衣のかん違いではないはずだ。

そのまま、芽衣は落ちた。真っ直ぐ、真っ直ぐ。

次に芽衣が気づいたとき、そこは自分の部屋のベッドの上だった。原稿用紙はどこかに消えている。部屋の時計を見ても、学校から帰ってきてから数分もたっていない。まるで全てが夢だったかのように部屋には変化がなかった。

そう、部屋には。

芽衣の頭に残る記憶。片方だけ外れたヘアゴム。そして何より、だめだめドボンが手のひらに入るときの、あの温かい感覚。

全てが物語っていた。原稿用紙に吸いこまれたことやコトカタ向上葛店と出会いあわあわさんと出会ったこと。美味しいケーキを食べたことに、だめだめドボンももらったこと。

それから、またいつか会うのだと、忘れないと、言い合ったこと。

「絶対に夢なんかじゃない」

夢なんかで終わらせない。きっとまた会えると信じて、芽衣は花のヘアゴムを両手で強くにぎりしめる。  
芽衣の中にある、深い海の色のソレが、優しく笑った気がした。